周　静怡

ZHOU Jingyi

Metallic taste

コラージュ、ドローイング、雁皮刷り、銅版

Metallic taste

銅版画を制作しているとき、銅に刻まれた傷を何度も触ったが、手に残った匂いは、子供の頃に遊具で遊んだ後に手のひらに残った金属の匂いを思い出させた。

私の作品のテーマは子供時代についてで、子供時代に生じる孤独感や不安感を捉えたいと思っている。しかし、この孤独感や不安感は抽象的な情緒であり、表現することが難しい。子供時代はまだ自分の感情を正しく認識する能力が構築されていなかったため、表現することができなかった。大人になってからはむしろ主観的にこの情緒を無視していた。

大人になって再び遊園地に遊びに行ったとき、ひとつひとつの遊具で遊び、わずかに揺れるシーソーを眺めた。夕暮れの直射日光で目を開けられず、手にした金属の匂いを嗅ぎ、遊具の揺れの隙間に、私の心の中のシーソーがあり、それが常に揺れているような気がした。 それは私の心の中で揺れ続け、この孤独感と不安感を表れている。それはまるで、私のすべての意識においてこの浮き沈みと振れ幅に束縛されていることを思い出させる絶え間ないメトロノームのようで、いつも平衡を追い求めたくなる。 しかし、自分の過去が今の自分を作っていることに気づいて、過去の自分を手放せない。その平衡がもう戻ることはできない。

この感覚を記録したくて、「Metallic Taste」というタイトルでコラージュ版画を制作した。「Metallic Taste」は主にシーソーの左端と右端のイメージを使った作品である。左端は子供の頃の私の記憶、右端は今の私の記憶を表している。作品の中で繰り返されるいくつかの版の複製は、私の混沌とした記憶の壊れた断片のようであり、重なる雁皮紙は、記憶のために常に繕っているつぎはぎのようである。長時間に腐食した銅板の痕跡は、まるで金属的な味の匂いがするかのようだ。それは、私の子供時代の孤独と不安であり、それを捉え、版画の隙間に散らばっているモノタイプやドローイングと組み合わせることで、少しずつ、私の心の中のシーソーを表現した。

手に残る金属の匂いを嗅ぎながら、わずかに揺れるシーソーを眺め、私はその片端に座り、グリップハンドルをしっかりと手に持ち、シーソーと一緒に上下し続け、子供時代の私と一緒に揺らし、一緒に遊び、一緒に対峙して、平衡を探し続けている。